

五四運動の諸前提

——とくに湖南を中心として——

清　　水　　稔

(一) 問題の所在

一九一九年五月四日北京に始まった五四運動はまたたくまに全国を席卷した。湖南の省都長沙では、省当局の報道管制を破って、五月九日湖南の二大新聞『湖南大公報』『湖南日報』が、北京の学生たちによる五四愛国運動の模様を生々しく報道したが、当局による集会や伝單^{ビラ}の配布等を禁止する嚴戒体制がしかれ、これに呼応する動きは表面的には封じられていた。しかし長沙の学生たちは、当局の監視の目をくぐって日貨排斥の宣伝活動を執拗に続け、その輪を拡大しつつあった。それに激発されて省教育会・省総商会・省農会・省議會も反日救国の姿勢を明示するにいたり、五月二八日には、湖南五四運動の中核となる二つの組織体が誕生した。湖南学生連合会と湖南国貨維持会がそれである。この両者はその後相互に深く関わりあいながら、湖南における五四運動の新たな地平を切り開いていった。

湖南五四運動は、安徽派軍閥張敬堯との闘いであった。反日としての五四運動は、全国的には六月末の講和条約の調印拒否によって大きな山場を越えたけれども、湖南ではそれを契機に、従来の日貨排斥の運動から反安徽派・反張敬堯の運動（驅張運動）へと移行し、翌二〇年六月には張敬堯が湖南から追放されて湖南の五四運動は終焉するに

たった。本稿では、このような湖南五四運動を生み出すにいたった背景について、主に次の三点に焦点をあてながら素描しようとするものである。^①

(1) 湖南では、中華民国成立以来、中央政府の派遣した客軍である北洋軍閥(湯薌銘・傅良佐ら)と、辛亥革命期に省権力を掌握し、その後湖南経済の担い手となってきた地方有力者層を基盤とする在地軍閥譚延闓らとの間で、恒常的な内戦が展開されていた。そのなかにあつて一九一八年三月湖南督軍兼省長となつた張敬堯は、安徽派の率いる北京政府の尖兵として暴虐のかぎりを尽くした。張敬堯のこの略奪的ともいえる軍事的な占領支配は、湖南省民諸階層の生産と生存を極端に圧迫した。

(2) 湖南はまた、豊かな鉱産資源と農産物・手工業製品を有する地域であり、列強の垂涎的であつた。一八九九年一月の岳州の開港をかわきりに、一九〇四年七月長沙が開港、翌年には湘潭・常德が開港され、列強による湖南への経済的侵略は拡大の一途を辿り、湖南は、列強の原料調達および商品・資本輸出の市場と化していった。第一次世界大戦期には日本とアメリカ、とくに日本の経済的侵略が著しかった。たとえば湖南市場において、生活必需品である石鹼・齒磨粉・漂白紙・マッチ・ハンカチ・タオル等の日用雑貨に占める日本商品の割合は大きく、それらが湖南在来の家内手工業的製品と競合していたために、湖南の産業に与えた打撃はきわめて大きかつた。

(3) 湖南では、五四運動という反日救国の政治闘争と表裏の関係で、広範にしかも深く新文化運動が進展した。新文化運動は「民主」と「科学」をスローガンに掲げ、封建的な思想・文化・道德・習慣を徹底的に批判し、自我の確立や個性の解放をその原点として追求したものである。その拠点となつたのが一九一五年九月上海で創刊された雑誌『新青年』である。彼らの「自主的、進歩的、進取的、世界的、実利的、科学的であれ」との呼びかけは、時代の閉塞状況のなかで苦しむ青年・学生たちに深い感銘を与えた。一九一八年四月毛沢東らが長沙で結成した「新民学会」は、その影響下に生まれた倫理革命の実践組織であり、のちの長沙の五四運動・駆張運動において指導的な役割

を担うことになった。

(二) 湖南における軍閥支配

湖南省は、辛亥革命以来の南北対峙のなかで軍閥が入り乱れて争奪を繰り返した地域である。他省に比べてその混乱は激烈であった。一九一〇年代をみるだけでも、省権力は猫の目のように交替している。一九一一年一〇月二二日長沙に誕生した湖南革命政權はわずか一〇日で崩壊し、立憲派の巨頭譚延闓が政權を奪取した。しかし湖南在地勢力をバックとする譚延闓は北洋軍閥から忌避され、一三年一〇月には袁世凱の腹心中の腹心湯鄉銘に湖南都督の座を奪われた。袁世凱亡きあとの一六年八月、譚延闓は復権を果たしたが、その命脈はわずか一年であった。その後段祺瑞の執政期には、彼の腹心傅良佐（督軍在位一九一七年八月—一月）、張敬堯（同一九一八年三月—二〇年六月）らが督軍として湖南に進駐した。南北の要衝にある湖南は各軍閥の草刈り場であった。北洋軍閥は湖南に盤踞して広東・広西の制圧をめざし、在地および南方の軍閥は湖南を北進のための拠点とした。そのため湖南はまさに恒常的な内戦状態に置かれ、湖南民衆の生活は惨憺たるものとなった。

一般的に軍閥とは、軍事力を背景に私的蓄財や軍費調達のために公的機関を掌握し、税による収奪と人材・物資の徴発を強要する集団（あるいはその代表者）を指す。南北両軍閥は、ともに基本的にはこのような集団である。とくに北洋軍閥による湖南の占領は、彼らの総帥の武力による全国制覇の一環であり、また彼らが湖南にとっては客軍であったことから、軍事占領的な意味合いが強かった。彼らの支配は、省経済を無視した公債・紙幣の乱発、民衆の再生産を無視した収奪・徴発・暴行等まさに略奪的ともいえるものであった。さらに彼らの守護者たる北京政府は深刻な財政難に見舞われており、中央からの軍餉を期待しえなかった。それゆえ地方の軍閥には、在地における収奪以外に生存の道はなかったのである。

まず湖南省政府の財政状況をみると、軍事予算の占める比率がきわめて高かったことである。一九一三年から一九年の予算表の収入と軍事支出の割合を比較すると、毎年平均でほぼ五〇数パーセントが軍事費であった。^③一九一九年張敬堯が督軍の時は約五七パーセントが軍事費であったが、実際の執行にあたっては教育費その他の費目を軍事費に流用したので、^④省財政は全くの軍事予算であったといつてよい。歳入状況をみると、一九一三年から一九年にかけての予算の収入源は、毎年平均で田賦が全収入のうち四〇数パーセント、釐金^⑤が四〇パーセント前後、契税が一〇パーセント前後を占めていた。^⑥このことから省財政の中心が土地と商品流通からの税収入にあったことがわかる。また税収の増加をはかるために、田賦の増徴およびその付加税徴収と予徴^⑦、釐金の増税、各種捐税の増設と税率アップ等あらゆる手段が講じられたのである。^⑧湖南の近代工場のシンボルとして成長の著しかった華昌煉銅会社が倒産した要因の一つは、関税・釐金を始めとする堤工捐・学捐・碼頭捐・軍事特捐・井捐等の膨大な税収奪にあったといふ。^⑨

次に軍閥による金融政策もまた、税収奪とともに湖南の民衆に過重な負担を強いるとともに、湖南の近代産業の発展を阻害した。湯壽銘統治下の一九一四年の決算では、銀行収入が総収入の一六パーセントを占めていたのが、張敬堯統治下の一九年の決算ではその費目がなくなっている。^⑩いずれにせよ金融の要である銀行が軍閥の直轄下に置かれ、鈔票・公債が乱発されて、私的な蓄財や資金流用の機関となっていたのである。官營湖南銀行が発行した銅元票を例にとると、一九一二年末は一一〇〇萬元だったものが、一六年末には五三八三萬元、一八年末には七一〇〇萬元に増加した。^⑪また一八年八月張敬堯は金融整頓を口実に、この湖南銀行を閉鎖して裕湘銀行（湖南の人々は「禍湘銀行」と呼んだ）を設立した。資本金一千万円は、北京政府・外国公司からの借款と、湖南財界からの強制取り立て金によるものであり、銀行の經理は、錢を求める以外に何も知らない張敬堯の部下が担当していた。^⑫張敬堯はただちに裕湘銀行に命じて銀元票一千万円、銅元票三千万円を発行させるとともに、湖南銀行票の無効を宣言し、湖南銀行清理処を設けて「有獎惠民券」（あるいは「惠民獎券」「惠民彩券」ともいう）二〇〇万枚を発行させ、一枚銀洋五元の割

合で湖南銀行券との交換を強要した。¹⁴ 当時その他にも、湘西債票、湘西銀行票、湘南軍用票・債票、広西銀行票等が市場に氾濫していた。¹⁵ そのため一五年当時五六パーセントであった湖南銀行の鈔票の流通価値は、閉鎖された一八年には銀元票一元に対し湖南銀元票三元となり、翌一九年には一五、六元へと急落、湖南銀行券は廢紙同然となった。¹⁶ また湖南省内の他種の紙幣価値もわずか数パーセントしかなく、さらに低落の傾向にあった。¹⁷ こうした張敬堯の乱暴な金融政策は貨幣価値の急落と物価の高騰を招いた。とりわけ連年にわたる自然災害と内戦、軍費捻出のための米の省外移輸出、軍用米の強制割当、民田の強制買上げ等があいまって、米不足と米価の急騰をもたらした。第一次世界大戦前には一石五元ほどであった米価が、一九年にはその三倍を越えるにいたったという。¹⁸

軍閥は自らの権力維持のためにあらゆる手段をもちいて財源の確保に奔走した。たとえば張敬堯は、鉅山利権・湖南第一紡績・沅江官田・湖南銀行資産・湘吉汽船等の省有財産の売却、あるいはその省有財産等を担保とする外国からの借款、アヘンの強制栽培、官職を利用し武力を背景とした強制寄付等を強行した。このような省権力を私物化した暴政は枚挙に暇がない。¹⁹

とくに湖南の民衆を恐怖に陥れたのは、長期にわたる軍閥の内戦の災禍であり、兵士による略奪・暴行であった。一九一七年九月、劉建藩・林修梅が孫文の「護法」のスローガンに呼応して、衡州・永州で独立を宣言、第三革命の幕が切って落とされた。²⁰ しかし第三革命は西南軍閥の利用するところとなり、南北両軍閥の内戦へと変質した。戦火は二年近くに及び、湖南は南北の軍閥対決の主要な戦場となり、その被害は甚大であった。『宝慶兵災紀実』によれば、宝慶では「(一九一七年)冬以来、南北五陷五復、往来十決十蕩。戦火の及ぶ所、血肉飛び散り、戎馬一度通れば、閭里はみな廢墟と化した。商業は凋落し、民衆は流浪し、田園は荒れ果て、学校は草ぼうぼうとなった」と。²¹ また『湘災紀略』によると、醴陵(人口五八万人)では、県城にもととあった七千余棟の建物が、長期にわたる戦乱の後残ったのはわずか四、五百棟のあばら家と便所だけで、その被害総数は殺された人二二五四三名、負傷者一九一七

名、焼失家屋一四七五二棟、損失財産一九四一万元であったと記している⁽²¹⁾。とりわけ湖南に進駐してきた張敬堯（安徽派）率いる第七師団の規律の劣悪さと残虐ぶりは北軍中随一であった。湖南の民衆は張敬堯を「張毒」「毒菌」（毒・菌ともに督軍の督と同音）と呼び、また昔夏の人々は「桀とともにみな亡びん」といったことをもじって、今の湖南は「堯・舜・禹・湯（張の四兄弟はそれぞれの名前の一字に古代の聖人の名を入れていた）とともにみな亡ぶであらう」とあてこすったほどである。上海の各新聞も、帝国主義の植民地支配でもこのような凶暴な手段はとらないであらうと述べるほどであり、その暴政ぶりが推測できよう⁽²²⁾。

五四運動前夜、軍閥の内戦は一時的に停止されたけれども、湖南は軍閥の割拠する四分五裂の状況にあった。安徽派軍閥張敬堯は、湖南督軍兼省長であるとはいえ、その支配地域は全省七五県のうち二〇余県にすぎなかった⁽²³⁾。しかもそのうち彼の威令が届くのは、第七師団の駐屯する岳州・長沙・宝慶の一線にすぎなかった。それを包囲するかのうに北洋各派の軍閥が盤踞していた。衡州一带には直隸派軍閥呉佩孚の第三師団が南軍監視のために駐留、常德一帯には直隸派軍閥馮玉祥の第一六混成旅団がいた。その他、長沙・岳州に隣接する諸県には直隸派の李奎元・范国璋、奉天派の張宗昌らの部隊が割拠していた。湘西の沅陵・辰州・麻陽・淑浦等には貴州・雲南・広西系の小軍閥が割拠し、半独立の状態を呈していた。また湖南には、北軍と対峙する形で譚延闓・程潜・趙恒惕らの湖南軍が郴州・永州を中心に勢力を維持し、湘南および湘西の一部を含む二〇余県を支配していた⁽²⁴⁾。

政治的にも、民衆の基本的権利である言論・出版・集会・結社等の自由は抑圧されていた。袁世凱政府は一九二二年八月に『中華民国暫行新刑律』を公布し、そこに規定された内乱罪・騒乱罪・秩序妨害罪は、革命運動・労働運動等の民衆の抵抗を厳しく取り締まるためのものであった。たとえば同盟罷工の首謀者には四等以下の有期徒刑・拘役あるいは三〇〇元以下の罰金、同調者には拘役あるいは三〇元以下の罰金を課したのである。また一二年一二月には『戒嚴法』、一三年一月には『懲治盜匪法』、一四年三月には『治安警察条例』『予戒法』を公布した。これらの法

律は、民衆の言論・出版・集会・結社の自由の制限を治安警察権の行使できる範囲内であると規定し、政治結社・政治集会を禁止、さらに政治に関係のない屋外集会や団体行動をも禁止・取り締まりの対象とした。²⁵これによって軍閥の専制に反対し、労働等の改善を求めて闘う人々に対する、政治的な迫害や拘禁・惨殺は日常化していった。

袁世凱の帝制への露払いを湖南で演じた湯薌銘は、「陸軍模範監獄」を設立、監獄内は人で満ち溢れていたという。長沙だけでも無実の罪で極刑を受けたものは一万人を越え、「湯屠（督軍の督と同音）の重要な政務は抄（略奪）と押（拘禁）と殺（惨殺）である」と揶揄された。²⁶一九一七年の第三革命の時に、湖南督軍傅良佐は革命運動を弾圧するために戒嚴令を布告し、そのなかで時局を妨害すると認められる集会・結社・新聞・雑誌・絵画等の禁止、郵便・電報の事前検閲や差し止め、臨戦地域における建物・船舶内の強制搜索の容認等を規定した。²⁷その後継である張敬堯もまたしばしば戒嚴令を布告し、またとくに当時の湖南の良識を代表する二大新聞『長沙大公報』『湖南日報』への検閲を強化し、記事差し止め・発禁処分、さらには新聞社の閉鎖・記者の拘禁を繰り返した。とりわけ湖南五四運動の展開のなかでは、民衆の日貨排斥等を求める集会・示威・罷課^{ストライキ}に対し、軍警を派遣して包囲し武力による威嚇を行ったり、また講演や演劇活動、伝單の配布、小新聞・小雑誌の刊行、国貨販売や日貨調査等に対しさまざまな妨害を加えたり、時には秩序妨害・治安擾乱の廉で逮捕・拘禁を強行したり、暴虐のかぎりを尽くした。張敬堯ら四兄弟は、虎・豹・豺・狼と称され、湖南民衆の怨嗟^{うらみ}の的となっていた。²⁸

第二革命で反対派を一掃した袁世凱は一段と独裁を強化した。一九一三年一〇月正式に大總統に就任、一月には国民党の解散、翌一四年一月には国会の解散を強行、五月には臨時約法にかえて大總統に権限を集中する新約法を制定した。また思想統制策として儒教の国教化をはかるために、尊孔運動に乗り出し、九月には北京で孔子を祭る大盛典を行ない、思想強化をはかった。²⁹長沙でも、一五年八月湖南教育會會長葉德輝が經学会をつくり、「尊孔読経」を大いに鼓吹するとともに、籌安會湖南支部會長として袁世凱の皇帝推戴を宣揚した。³⁰また衡陽一帯を支配していた軍

閻吳佩孚は一八年冬に『女史節要全書』を編纂させて、「三從四德」の礼教を称揚した。張敬堯も、罷課中の学生に対する訓戒あるいは教職員・校長会に対する訓話のなかで、「湖南の民は督軍の子女である」と語りかけ、読経の重要性と忠・孝の尊さを説いて、儒教倫理の学習を強要していた。とりわけ張敬堯の教育に対する破壊的弾圧と収奪は想像を絶するものがあつた。その第一は、教育経費（学校運営・教職員の給与等）の大幅削減とその遅配・未払いの問題である。たとえ支払われたとしても価値のほとんどない裕湘銀行券が大半を占め、受け取る額も規定の二割にも満たなかつた。ついに一九年一月からは一文も支給されなくなつた。この教育経費のうわまえをはねた部分は軍餉にあてられるか、私腹を肥やすためのものとなつた。第二は、校舎・寄宿舎が兵営と化したことである。湖南第一師範学校では、張敬堯の弟張敬湯率いる第一混成旅団が寄宿舎・教室を占拠し、四〇〇余名の生徒たちは校舎の一隅に押しやられ、兵士の横暴と監視のもとで細々と授業を続けるしかなかつた。長沙各校の大部分がこのようなありさまであつた。

湖南民衆はこのような軍閥の暴虐による苦しみのなかで、軍閥の圧政に反対する闘いを準備していったのである。

(三) 帝國主義による湖南侵略

五四運動の直接的な動因は、山東におけるドイツ權益が日本へ継承されたことであつたが、その運動を全国的・国民的規模で闘わせるにいたつた背景には、二一か条要求以来強化された日本帝國主義の侵略があり、またそれによつて醸成された中国民衆の亡国の危機感があつた。ここで湖南における帝國主義諸列強の侵略の状況を確認しておく。

湖南は内陸中央に位置していたために、沿海諸地域に比べて外国の影響を受けることが比較的少なかつた。しかし一八六二年一月の漢口の開港に伴い、そのヒンターランドとしての湖南に注目が集まり、諸列強の商品が次第に流入するようになった。とりわけ九九年十一月岳州、一九〇四年七月省都長沙、ついで翌年には常德・湘潭が相次いで開

港されると、日本・ドイツ・イギリス等の船舶による湖南進出が急激に増加していった。³²

第一次世界大戦期に入ると、イギリス・ドイツ・フランス・ロシア等はヨーロッパ戦線に忙殺され、一時的に中国から後退、かわって日本とアメリカが中国で優位を占めるにいたった。長沙・岳州両税関における輸入総額をみてみると、一九一五年は一二七〇余万両、一六年が一三〇九余万両、一八年が一二二三余万両とあまり変化はみられないが、そのなかで日本・アメリカ商品の占める割合が大幅に増加している。³³とくに日本の湖南への商品輸出額が、五四運動前夜にはイギリスにかわって第一位となった。当時日本は独占資本主義の確立期にあたり、原料供給市場、商品・資本輸出市場としての中国の役割が重要になってきていた。日本は西原借款に象徴的にみられるように、南北両政府の分裂・内戦、軍閥の割拠を利用し、そのなかでもっとも反動的な軍閥安徽派とその掌握下にある北京政府（段祺瑞内閣）に空前の軍事・財政援助を与え、彼らを通じて中国の独占的支配をもくろんでいた。

湖南の豊かな鉱産資源や農産物等に対する日本の関心度はきわめて高かった。³⁵一九一八年当時の漢口には、二五〇〇名近い日本人が在住し、石鹼・硝子・精油・鉄工等の工場や商店、商社の支店が林立していた。この漢口を拠点として長沙・常德・湘潭との間に、日本の戴生昌汽船や日清汽船の航路がひかれていた。省都長沙には一九年当時二〇〇名を越える日本人が常駐していた。大倉・三菱・三井・大石等の商社の他に、三合洋行（硝子）・大同鉱業（精錬）・中日銀行等が進出し、湘江沿いの波止場には日本の商店や出張所が軒を並べていた。ここから長沙に流入するのは石鹼・タオル・歯磨粉・漂白紙・マッチ・傘・顔料等の日用雑貨が主力であり、それが湖南市場の八〇パーセント近くを占有していた。³⁶

帝国主義諸列強は、湖南に大量の商品を送り込むと同時に、また湖南から経済的な利権や大量の資源を収奪していた。鉄道敷設権や鉱山採掘権、農産品や鉱産資源等がそれである。鉱産資源とその利権を中心にその実態をみておく。長沙・岳州税関における輸出総額は、一九一〇年が一四四万余両、一二年が一二八万余両、一五年が一四八

一万余両、一六年が一八一四万余両、一七年が一七四六万余両であり、そのうち一五年から一七年の間は鉱産物が半分近くを占めていた。³⁷⁾ 湖南の鉱産資源はやくから外国資本の手に握られ、しかも精錬技術の拙劣さもあって鉱石あるいは粗精製の鉱産物として輸出されていた。湖南最大の鉛・亜鉛鉱山水口山（常寧）は、ドイツの礼和洋行を中心とする外国商社との間に毎年売買契約を結び、時には借款との引き換えを条件に鉱石を売却した。契約書には四万トン、六万トン、一〇万トン等と記されているが、水口山の年産額は一四年段階でやっと二万トン程度であったというから、同鉱山の鉱石は何年か先まで独占的に買い占められていたことになる。また鉱石の売買価格も国内業者価格の六、七〇パーセントで、第一次世界大戦の好景気で鉱石の値段が高騰しても、契約時の低価格に押さえられていた。³⁸⁾

中国の対独宣戦によって水口山の利権は、ドイツにかわって日本・アメリカ・イギリスの争奪の的となった。張敬堯もこの利権を最大限に利用して、外国の借款を引き出そうとした。日本の湯浅・三菱・大倉・鈴木等の六洋行および三井洋行との間でそれぞれ水口山の鉱産を担保とする借款契約を結ぶとともに、アメリカの慎昌洋行との間にも水口山の合弁化事業推進のために借款契約を締結した。また湖南亜鉛精錬所の合弁事業を進めるためにアメリカの太平実業会社と借款契約をもくろんだ時も、水口山の亜鉛鉱がその担保とされた。さらに湖南の未採掘鉱山の鉱産を担保にしてイギリスの会社から借款を引き出そうとした。こうした張敬堯による利権を担保とする借款政策を通じて、帝國主義の資本が湖南へ流入していった。³⁹⁾

第一次世界大戦末期とくに戦争終結直後、世界の鉱業市場の需要が急激に落ち込んだことから、湖南のアンチモン（銻）・鉛・亜鉛等の価格も急落し、鉱産量も急激に下降した。たとえば一九一九年のアンチモン鉱石の価格も輸出総額は、一六年の一〇分の一にまで急落し、鉱山ラッシュのなかで設立された中小鉱山は相次いで倒産した。外国資本から自立して隆盛を誇ってきた華昌煉銻公司も、張敬堯による苛酷な税収奪や外国資本等の集中攻撃のなかで倒産を余儀なくされたのである。⁴⁰⁾ これは湖南の鉱工業経済が世界市場と深く連動しているとともに、湖南の鉱産資源

も外国資本のもとに完全に組み込まれていたことを物語っている。

帝國主義諸列強の湖南における拠点は、商社や工場であり、金融機関であり、領事館であった。統計によると、外人が通商のために湖南に設けた洋行の拠点は、一九一六年当時四〇余埠を数えた。⁽⁴¹⁾五四運動の起こった一九年の長沙を例にとると、日本・イギリス・アメリカの領事館三か所、商店四九軒、銀行二行、郵便局一か所、税関員一名、アメリカ人二一九名、イギリス人七七名、日本人二一三名であったという。⁽⁴²⁾この他に文化・教育・宗教の拠点もあげることができる。辛亥革命前に湖南に在住していた宣教師（米・英・独・ノルウェー）は二二三名であったが、一四年冬には三一六名を数えるにいたった。そのなかでもっとも大きな勢力を有したのはアメリカである。⁽⁴³⁾また湖南で外人の経営による学校を最初に設立したのもアメリカ人であった。それはイエール大学の卒業生が国外でのキリス教布教のために創設した雅礼（イエール）会によってである。彼らは一九〇二年に来華し、〇六年に長沙に雅礼学校をつくり、その後一四年には湖南育群学会と共同で湘雅医学専門学校を設立した。⁽⁴⁴⁾こうした雅礼会等の布教活動あるいは医療・教育活動が、湖南における政的・経済的・文化的侵略の先兵的役割を担っていたのである。⁽⁴⁵⁾

帝國主義諸列強のなかで、当時政治的にも経済的にも露骨な中国侵略を行なったの日本であった。これに対し湖南の民衆は、全国の民衆とともにたえず日本の侵略に反対する闘いを組織してきた。一九一五年袁世凱が對華二一か条要求を受諾した時にも、また一八年代祺瑞政府が中日共同防敵軍事協定を締結した時にも、湖南の民衆は決起し、二度にわたって日貨ボイコット運動を展開したが、軍閥の強圧的な武力の前に押しつぶされた。しかしそこで示された亡国の危機から祖国を守ろうとする不撓不屈の精神は脈々と受け継がれ、それはやがて一九年の五四運動の爆発となって表出し、湖南ではさらにそれを継承した駆張闘争を生み出し、「湖南人の湖南」を作り出すにいたったのである。

(四) 湖南の近代産業と労働者

湖南における近代工業の発生と発展は沿海地域より遅かった。湖南に近代工場設立の機運が芽生えたのは、変法派官僚陳宝箴が湖南巡撫に着任した一八九五年以降である。陳宝箴は、着任と同時に湖南礦務総局を設立して湖南の諸鉱山の官営化を推し進め、水口山鉱山等では西洋の機械・技術を導入して近代化をはかった。⁽⁴⁶⁾ また九五年一月には張祖同らの紳士と、難民救済を目的とする和豊火柴公司（マッチ製造）を設立、翌九六年には紳士王先謙らによって宝善機器製造公司（電灯・人力車等の製造）が設けられた。⁽⁴⁷⁾ 以後辛亥革命の時期までに創設された企業は五〇をはるかに越えていたと思われるが、それは多くは鉱業部門であり、しかもそれらの工場の大半は手工業的労働の性質をもち、操業と停止を繰り返していた。そのなかにあつて近代的な企業と称され、比較的長く操業していたものは、湖南造幣廠・醴陵瓷業公司・華昌煉錫公司・湖南電灯公司・湖南黒鉛煉廠・平江黄金洞金洞等の数企業にすぎなかった。したがつてこの期間の湖南近代産業労働者の数は一万人前後と推定される。⁽⁴⁸⁾

辛亥革命の進展とともに企業の創設が相次ぎ、毎日のように新会社の登記が行なわれたという。しかし革命の成果が袁世凱に奪われると、軍閥や帝国主義の干渉が強まり、登記された新会社の大半は潰れるか、あるいは金融恐慌のなかで営業不振に陥らざるをえなかった。⁽⁴⁹⁾ 第一次世界大戦期を迎えると、湖南の工業は急速に発展した。統計調査によれば、⁽⁵⁰⁾ 一九一二年から一九年の五四運動期までに設立された、資本金一万元以上の近代企業は三〇を越えた。そのなかにあつて一〇にのぼる電灯会社の設立、中華汽船や湘江輪船等の設立、湖南銀行・儲蓄銀行・交通銀行の省内支店の開設、武昌―長沙間の鉄道の開通等は、その後の湖南の近代産業発展の基礎となるものであつた。しかし多くの企業は、辛亥革命前に創設された華昌煉錫公司・湖南黒鉛煉廠等と同様に、市場を外国資本に押さえられ、さらに軍閥のあくことなき収奪と軍閥の内戦、また鉱工業技術の未成熟さ等のゆえに、自立的な発展を遂げることは不可能で

あった。

湖南鉍業も第一次世界大戦期に飛躍的に発展した。そのうち帝国主義諸列強が弾薬の原料として競って購入したアンチモン・鉛・亜鉛の鉍業部門がとくにめざましかった。たとえば水口山の鉛・亜鉛の鉍産量を例にとると、一九一二年が一二四三一トン、一四年が二三三二一トン、一六年が三七七七八トンと増加した。⁽⁵¹⁾新化錫鉍山のアンチモン鉍では、会社が百余も林立し、労働者も三、四万から一〇万人近くに膨れ上がった。長沙・岳州の両税関でのアンチモン（精錬・未精錬を含む）の輸出総額は、一九一二年が二六万余石であったが、一四年には四五万余石、一六年には五四万余石に急増した。⁽⁵²⁾石炭・マンガンの錫・タングステン等の鉍産資源も同様に発展した。⁽⁵³⁾しかし大戦終結とともに需要が落ち込み、世界市場が低迷すると、湖南の鉍業も凋落した。その状況は前述した通りである。

湖南における近代産業労働者の出現は、湖南の近代鉍工業が急成長した一九一〇年代のことである。⁽⁵⁴⁾その典型は、華昌煉錫公司与湖南黒鉛煉廠である。最盛時には前者は一万の、後者は千から二千の工場労働者を擁した。また和豊火柴公司は一九一〇年代の盛時には二千から三千の工場労働者を抱え、さらに二万余の家庭内職の賃労働がそれを外部から支えていた。その他、電灯公司・造幣廠・兵工廠・麓山瑠璃公司・第一機械製粉公司・湘鄂印刷公司等の労働者や鉄道労働者を加えると、大戦期から二〇年代初頭にかけての湖南の近代産業労働者は二万余人と推定される。⁽⁵⁵⁾

湖南の鉍山の開発ラッシュのなかで、一九一六年には八千余りの鉍山が開掘され、各鉍には二〇人以上の労働者が雇用されていたこと⁽⁵⁶⁾から考えると、鉍山労働者は単純に見積っても一六万人を越える。さらに採掘の実績を持つ近代的な鉍山をみてみると、華昌煉錫公司是安化・益陽等に鉍山をもつて採掘し、鉍石を長沙に輸送している。それに携わる労働者は最盛時には一万（技術工二千余を含む）を数え、水口山鉍山には盛時には五、六千人がいたという。⁽⁵⁷⁾これらを総合すると、第一次世界大戦期には鉍山労働者の総数は一〇数万から二〇万位と推測されるが、その多くは請負制度に組み込まれ、かつ土法で採掘する労働者であった。

この他にも膨大な数の人力車夫・港湾労働者・轎夫・水運搬夫等の雑業労働者、理髪・大工・左官等の職人、靴下・足袋・刺繡・織布・製紙・製油・染顔料・製茶等の製造にかかわる手工業者が存在している。人口三〇万以上を擁した省都長沙では、一九二〇年前後には一万人近い雑業労働者（人力車夫四〇〇〇、港湾労働者二六〇〇、轎夫一五〇〇等）がおり、理髪職人が七、八百名、大工・左官が一万名いたという。⁶⁸

帝国主義諸列強の湖南に対する商品・資本輸出等の強化、それと深く結びついた軍閥による湖南の利権や資源の売却政策および省民の再生産を無視した金融・財政政策、さらには連年の自然災害、恒常的な内戦等によって、湖南の産業界は一九一八年になると、きわめて深刻な不況に陥り、企業の倒産と失業者が増大した。さらに米価を始めとする諸物価の騰貴は、銅元と銀元の交換比率の低下や紙幣価値の急落とあいまって湖南民衆の生存を脅かし、とりわけ職人・賃労働者にとっては深刻な問題であった。彼らは、賃上げと（紙幣払いから）銅元払いを求めて闘いに立ち上がった。

ここで彼らの一九一〇年代後半の闘いの一端を一瞥しておこう。一九一六年一〇月、平江の黄金洞で鉱山労働者三百余人が労働強化と労働時間の延長に反対して決起し、鉱山警察から武器・弾薬を奪う暴動に発展した。⁶⁹ 一七年四月、常寧の水口山鉱山で千余人の労働者が、物価の高騰による生活苦をうったえ、賃上げの要求と報奨金のカットに反対してストライキを敢行、当局の武力行使をはねのけて鉱務分局を占拠し、要求の貫徹をはかった。⁶⁹ 長沙では雑業労働者や職人のストライキが波状的に繰り広げられた。一七年三月には製材工らによる賃上げストライキがあり、五月には港湾労働者が一致団結して賃金制度の改革と銅元払いを要求するストライキに入り、県当局・商会・工業総会・把头（親方）と真向から対決、ついに譲歩を引き出して争議は終わった。⁶⁹ 翌一八年六月、人力車夫は、車主が車捐の増税分を車租に転嫁したことに抗議して、車捐と車租の値上げの中止を求めてストライキに入ったが、警察庁の武力と車主の解雇通告のまゝに闘いは一週間で収束した。⁶⁹ 人力車夫の闘争と相前後して、大工・左官職人は、日当の値上げ

と自主賃金制度の実行を求めて県当局・警察庁・商会と二か月にわたって闘争、建築ブームによる人手不足もあって当局はついにその要求を黙認せざるをえなかった。⁶³九月には筆職人が店主に給与の銅元払いを要求して、一〇月には紙職人が日当の値上げを要求して、それぞれストライキに入り、その他、漆職人・酒醸造職人らも賃上げを求めて立ち上がった。翌一九九年になると、大工・左官の自主賃金制度の黙認の影響をうけ、広範な職種で賃上げの闘いが進められた。

こうした湖南の労働者のストライキや暴動はおおむね自然発生的な闘争段階にあった。闘いに向けての確たる組織をもたず、封建的なギルドの規制や迷信に縛られ、その影響を強く受けていた。彼らの闘いは、いつも雇用主や親方の労働強化・暴力・搾取に対する抗議であり、最低限の生活維持をはかるためのささやかな賃上げの要求であった。時には政治の渦中に巻き込まれ、しかも雇用主・親方に追隨することもあり、この闘いのなかではまだ独自の政治的要求や綱領を持つことはできなかった。しかし闘いのなかで一時的ではあっても闘争のための団結が芽生え、また軍閥の武力の前に結果として圧倒されたとはいえ一定の譲歩を勝ちとることもできた。その教訓と力量はその後の闘いのなかで継承され、鍛えられ、やがて彼らはロシアの一〇月革命の影響やマルクス主義を受容して、確固たる階級基盤を築き上げるにいたった。

(五) 湖南における新文化運動

辛亥革命は、二千年にわたる専制君主制度を終結させ、中国民衆に精神上空前の解放をもたらし、その後の民主革命の発展のための道程を切り開いた。しかし辛亥革命は、その成果を袁世凱ら軍閥勢力に奪われ、共和の実質を残さぬまま挫折した。袁世凱は、圧倒的な軍事力で、共和の実現を目指してきた国民党を非法化し、政治・社会・文化の全面にわたる復古を強行した。その頂点が一九一五年後半の帝制復活運動であった。このなかで誕生したのが『新

青年』（陳独秀主編、一五年九月上海で創刊）である。この雑誌は、暗黒のなかで苦悩する青年・知識人に専制と儒教と迷信の古い文化を徹底的に批判し、「民主と科学」に基づく新しい文化の創造を呼びかけた。その主張と実践はやがて新文化運動といわれる思想革新運動となった。

湖南における新文化運動は、五四運動という反日救国の政治・経済闘争と表裏の関係で広範に、深く進展したが、ここではそれにいたる経過を主として述べる。⁶⁶

暗黒の現実のなかから革命の真の主体をどのように構築していくのか。これが辛亥革命の挫折と反省から生まれた新たな課題であった。軍閥の蹂躪する湖南にあって、進歩的な知識人は近代西洋文化の紹介と宣揚によってその道を切り開こうとした。一九一四年初め、湖南第一師範学校の教員楊昌濟・方維漢・黎錦熙らは宏文圖書社をつくり、編訳館を併設して、東西の著作の翻訳を開始した。その目的は、近代的な思想を含んだ最近の欧米や日本の新聞・雑誌を選訳・紹介して、社会の刷新と民族的危機の救済をはかることにあった。さらに彼らは、東西両文明を融合し、言論の自由を実現して、思想界の沈滞を打ち破ることを目指したのである。⁶⁷

『新青年』発刊と時を同じくして、『長沙大公報』が生まれた。この新聞は、主幹劉人熙・貝允昕によって創刊され、李抱一・龍兼公・張平子らが編集を担当した。劉・貝はともに瀏陽出身で、変法派譚嗣同の師あるいは友人としてもよく知られている。劉人熙は辛亥革命後の湖南軍政府で民政司長をつとめた湖南を代表する名望紳士であり、貝允昕は劉の娘婿で、弁護士である。ここで『長沙大公報』の発刊の経緯を通して、この新聞が当時果たしていた役割を明らかにしておきたい。当時の湖南は、袁世凱の股肱の軍人湯壽銘が支配していた。彼は袁の皇帝推戴のために奔走し、国民党系の『長沙日報』（一九〇五年創刊）を始めとする反袁的新聞・雑誌、ジャーナリスト・知識人を次々と弾圧し、人々から「湯屠（戸）」と呼ばれて恐れられていた。このようななかで共和党系の『湖南公報』（一九一二年創刊）を袁の御用政党進歩党の機関紙にかえようとする動きが起こった。そのため貝允昕・龍兼公・張平子らは同報

を離れ、新たに新聞を創刊したのである。これが『長沙大公報』であった。この新聞は無党派を標榜してスタートしたが、創刊当初のいきさつから袁世凱の帝制には反対であったため、湯鄉銘からはたえず睨まれ続けた。その後も北洋軍閥の強圧的な支配のなかでしばしば発禁処分を受けたが、権力に屈することなく、湖南の良心を代表する新聞として、その命脈を保った。それは劉人熙・貝允昕の社会的地位と名望、彼らに繋がる湖南の商・工・農・鉦・学各界の人々の支援に負うところが大きかったと思われる。また『長沙大公報』は、当時の新聞としては異例の二千を越える部数を刊行していた。その秘密の一つは、創刊宣言で読者に提起した「共和を擁護して国家を強固にすること」「名実相伴う形で湖南の重要問題の解決をはかること」を、記事のなかで真摯に追求し、掲載し続けたことにもよる。⁶⁸

『新青年』を旗手とする新文化運動は、儒教批判・家族制度批判・婦人解放・文学革命となってあらわれ、「新旧思潮の大激戦」を引き起こした。⁶⁹とくにその基本となったものは儒教批判であり、儒教は奴隷の道德として厳しく批判された。湖南第一師範の教師易培基は、一九一五年一〇月『新青年』一卷二号で「述墨」の一文を発表し、儒教が利禄と結びつき、支配のイデオロギーとなっていることを批判した。さらに翌一六年二月の一卷六号、二巻一号には「孔子平議」を連載し、孔子の学説が歴史のなかで果たしてきた役割を鋭く批判している。それによると、漢の武帝以後、百家を退け、儒術のみ尊び、孔子を傀儡にして天下の思想を壟断し、思想の自由を喪失させてきた。以後歴代の専制君主は独夫・民賊以外のなものでもなく、野心をもつものはみな孔子を傀儡としてきた。その結果、孔子の尊君権は無制限となって独夫専制の弊害を生み出し、しかも孔子の学説に対する論難が許されないために思想専制の弊害を作り出したのだ、と。この挑戦的ともいえる孔子批判は、当時の思想界に大きな衝撃を与えた。

当時第一師範学校で修身・教育学・倫理学を教えていた楊昌濟は、教鞭をとるかたわら、校外で毎週一回哲学研究小組（グループ）を主宰し、西洋哲学や倫理学、宋元明哲学を教えていた。第一師範の生徒毛沢東・蔡和森・蕭子昇らはこれにも参加し、大きな影響を受けた。『新青年』が創刊されると、楊昌濟は第一師範の生徒や青年たちに『新青年』の購読

を大いに推奨した。『新青年』の主張は旧制度や儒教倫理の桎梏に苦しむ彼らに、新鮮で深い感銘を与えた。毛沢東も熱心な読者として、陳独秀・胡適・呉虞の論考を愛読するようになり、やがて楊昌済の推薦で『新青年』三卷三号に「体育の研究」（二十八画生のペンネームによる）を発表するにいたった。時に『時事新報』一九一九年一月二五日付の記事「湖南新思潮の発展」によれば、『新青年』の湖南における販売数は三〇〇余部と記されている。

毛沢東は一九一三年から一八年まで湖南第一師範で学び、ここで知識・学問の基礎を築くとともに、最初の社会活動の経験をした。彼の呼びかけに応じてくれた学友たち一〇数名と、会合をたえず開いて『新青年』の提供した諸問題や、いかにして個人や全人類の生活を向上させるか等について討論を重ねていた。一方、社会情況の調査や労働者・農民との関係にも重きを置くようになっていた。学友蕭子昇と長沙・寧郷・安化・益陽・沅江の五県を無銭旅行し、農民の生活を自らの目で確かめるとともに、湖南第一師範学友会の名で労働者夜学校をつくり、労働者との交流の場をもち、視野を広げていった。こうしたなかで当時新文化運動のなかで流行していた西洋文化への盲目的な礼讃を忌避し、中国の文化と西洋の文化を分析的・批判的に摂取する考え方を培っていた。彼は、枝葉末節の改良ではなく、根本的に国家や社会を改造する方法を探し求めようとした。その出発点となったのが、一八年四月一日に長沙で設立された「新民学会」である。新民学会は、当初毛沢東・蔡和森・何叔衡・李維漢・張昆弟ら湖南第一師範の学生・卒業生を中心に一三名で発足したが、湖南五四運動・駆張請願運動の闘いが高揚するなかで、その中核的役割を果たし、しだいに拡大・強化されて会員数七〇数名を数えるにいたった。学会は「學術を革新し、品行を錬磨し、人心風俗を改良する」ことを目的とし、会員に対し、嘘をつかない、怠けない、浪費しない、賭博をしない、妓女と戯れない、という規律を守ることを義務づけた。ここに示されたきわめて禁欲的な規律は、学会がやがて五四運動の担い手の一つとなり、その後社会主義的グループへと成長し、共産党の誕生に大きな役割を果たすなかで、革命の複雑で苦難を道を切り開くための自己変革の重要なファクターになったといえよう。

新民学会が最初に取り組んだのは、会員の拡大とともに、フランス勤工儉学運動⁽²⁾であった。学会の究極の目標は、救国救民の真理を追求して中国を改造することであった。彼らは、そのために省外・国外に出て、世界でもっとも進歩した学問・思想を求めようとした。その実現のためにフランス勤工儉学運動を積極的に推進したのである。毛沢東は、一九一八年八月に会員やその他の進歩的な青年知識人二五名とともに北京に出かけ、フランス勤工儉学の準備活動に入った。そのなかで北京大学の李大釗を始めとするさまざまな人達との出会いや体験を通じて、しだいに眼を開かされるとともに、マルクス主義にも触れる機会をえて、彼の新たな思想転換が始まった。翌一九年初め、彼は第一回フランス勤工儉学学生を送るため上海を訪れたのち、四月に長沙にもどった。それはまさに五四運動前夜であった。かくて北京に始まった五四運動は、湖南をもその渦中に巻き込み、全国的な規模で展開されたのである。

註

(1) 小論は、拙稿『湖南五四運動小史』（京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』五一六、同朋舎、一九九二）、『一九一〇年代、二〇年代の中国の社会構造——とくに両湖を中心として』（平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究（C）研究成果報告書、同朋舎印刷、一九九一）、『五四運動の思想的前提と湖南——虚偽の偶像を破壊せよ（陳独秀）』（『鷹陵史学』一六、一九九〇）を補充するものである。

また小論の作成にあたっては、嶋本信子「五四運動の継承形態——湖南の駆張運動を中心に」（『歴史学研究』三五五、一九六九）、古厩忠夫「中国における労働者階級の形成過程——一九一〇年代湖南省におけるプロレタリアと半ブ

ロレタリア」（『歴史学研究』三八三、一九七二）、同「中国における初期労働運動の性格——五四運動期の湖南省を中心に」上下（『歴史評論』二七五・二七六、一九七三）、金勝一「軍統閥治時期（一九一四—一九二六）の湖南農村社会経済の地域史的一考察——農村と農民の問題を中心として」（『九州大学東洋史論集』一七、一九八九）、さらに湖南省志編纂委員会編『湖南省志（一）湖南近百年大事記述』（第二次修訂本、湖南人民出版社、一九八〇、以下『湖南省志』と略称）、李銳「毛沢東の早期革命活動」（湖南人民出版社、一九八〇）、張朋園「中国現代化的区域研究——湖南省、一八六〇—一九一六年」（中央研究院近代研究所專刊四六、一九八三）、中共湖南省委党史委編『湖南人民革命史——新民主主義革命時期』（湖南人民出版社、一九九

(1) 等から多くの教示をえた。記して感謝の意を表する。

- (2) 金勝一「軍閥統治時代の湖南農村社会経済の地域史的一考察」(前掲)一三一頁の表一五、張朋園『中国現代化的区域研究』(前掲)二二一頁の表三一五—三参照。

- (3) 驅張闘争における張敬堯彈劾項目の一つ教育破壊の実態のなかに教育経費の不払いがあげられている。『上海民国日報』一九二〇年一月一九日「湖南各界人士痛斥張敬堯禍湘罪行」参照。なお一九一九年の予算に占める軍事實費五七パーセントは東亜同文会調査編纂部『第四回支那年鑑』(一九二〇)八二四—八三三頁による。

- (4) 『第四回支那年鑑』(同前)八一四頁、金勝一「軍閥統治時代の湖南農村社会経済の地域史的一考察」(前掲)一三一頁の表一六参照。

- (5) 金勝一「軍閥統治時代の湖南農村社会経済の地域史的一考察」(前掲)一三一—一三五頁参照。

- (6) 湖南省哲学社会科学研究所現代史研究室編『五四時期湖南人民革命闘争史料選編』(湖南人民出版社、一九七九、以下『湖南五四史料』と略称)「湖南人民驅逐封建軍閥張敬堯の闘争」苛徵雜稅」二〇七—二一〇頁。陳子釗「湖南之財政」(湖南經濟調査所、一九三四)第三章参照。

- (7) 『湖南歴史資料』一九五九—二「華昌煉鋸公司及其創辦人梁煥奎」。

- (8) 『支那』六—六(一九一五年三月—五日)「湖南通信」。

- (9) 胡適『湖南之金融』(湖南經濟調査所、一九三四)一四

頁。

- (10) 『長沙大公報』一九一八年五月二三日「新銀行之資金」張督軍整理湘省金融計画」、同前七月九日「裕湘銀行正式成立」。『湖南省志』(前掲)四一五頁。

- (11) 『湖南』一一二、三(湖南月刊社、一九一九年七月、二月)「湘省金融之現状」。『湖南省志』(前掲)四一六頁。『長沙大公報』一九一九年二月八日「提倡惠民獎票進行辦法」、同前二月二日「總商會勸購買惠民票」、同前二月二日「通令各屬認購買惠民票」等の記事にみられるように、惠民票の購買の強要が進められた。なお『湖南』は驅張雜誌として上海で創刊された。詳しくは中共中央馬克思・恩格斯・列寧・斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊介紹』二上(生活・讀書・新知三聯書店、一九七九)三六〇—三六一頁参照のこと。

- (12) 『湖南省志』(前掲)四一六頁。

- (13) 金勝一「軍閥統治時代の湖南農村社会経済の地域史的一考察」(前掲)一三七頁の表二三よると、湖南の鈔票価値は他省と比較してもっとも低かった。

- (14) 『上海総商會月報』三—六「中国商工業失敗の原因及補給方法」三八〇—三八三頁。『支那』一〇—一〇(一九一九年六月一日)「彙報」。

- (15) 『支那』一〇—四(一九一九年二月—五月)「彙報」七二頁。

- (16) 金勝一「軍閥統治時代の湖南農村社会経済の地域史的一

考察」(前掲)一三六一—一三七頁。

- (17) 東アジアと日本をめぐる米の輸移出については、嶋本信子「五四運動の継承形態」(前掲)および野沢豊「米騒動と五四運動」(「近きに在りて」創刊号、一九八一)を参照のこと。『支那』一〇—三(一九一九年二月一日)「湖南米の近況」、『錢業月報』二二三(一九二二)「今近六十年之中国米価」。古厓忠夫「中国における初期労働運動の性格」上(前掲)二九—三〇頁。

- (18) 『湖南五四史料』(前掲)「湖南人民駆逐封建軍閥張敬堯的闘争—張敬堯在湖南の罪惡」一九〇—二二三頁。

- (19) 『長沙大公報』一九一七年九月二九日「劉建藩獨立始末記」。

- (20) 『湖南人民革命史』(前掲)一二頁。

- (21) 同前。『湖南歴史資料』一九五九—三「護法運動期間南北軍閥在湖南造成的禍害」。

- (22) 陶菊隱『北洋統治時期史話』四(生活・読書・新知三聯書店、一九五七)一七二—一七三頁。

- (23) 『上海民権日報』一九一九年七月二日「千奇百怪之湖南」。

- (24) 拙稿『湖南五四運動小史』(前掲)二九—三〇頁。『湖南』一一(前掲)莫邪「為去張敬堯告北京政府」。

- (25) 張晉藩主編『中国法制史』(群衆出版社、一九八二)三九四—四〇一頁。

- (26) 『湖南省志』(前掲)三七—三三七二頁。

- (27) 『長沙大公報』一九一七年九月二日「督軍宣布戒嚴之布告」。

- (28) 拙稿『湖南五四運動小史』(前掲)参照。

- (29) 一九一三年六月に「通令尊崇孔聖文」を發布して孔子を祀る典禮を復活させた。『袁大總統書牘彙編』卷二(沈雲龍主編『袁世凱史料彙編統集』一一、文海出版社所収)。

- (30) 『長沙大公報』一九一八年一二月八日「女史節要之序文」。

- (31) 拙稿『湖南五四運動小史』(前掲)参照。李銳『毛沢東の早期革命活動』(前掲)六七—六九頁。『上海民権日報』一九二〇年一月九日「湖南各界人士痛斥張敬堯禍湘罪行」。湖南省博物館校編『蒸陽請願錄』(湖南人民出版社、一九七九)書牘(一)「張敬堯之罪狀」。

- (32) 中村義「長沙開港前後」(『歴史学研究』四二五、一九七五、中村義『辛亥革命研究』未來社、一九七九所収)参照。

- (33) 実業部國際貿易局編『最近三十四年来中国通商口岸對外貿易統計』中部一〇八頁。たとえばイギリスの一九一七、一八年の輸入額は一三年の半分、フランスの一八年のそれは一三年の三分の一以下であり、アメリカの一八年の輸入額は一三年の三倍、二〇年はその四倍、日本の一八年の輸入額は一四年の二・四倍であった。

- (34) 『中国通商口岸進出口貿易統計』二—三頁。

- (35) 中村義「長沙開港前後」(前掲)参照。

- (36) 東亜同文会調査編集部『支那開港場誌』(2)揚子江流域(一九二四)三三七—四一七頁、『長沙大公報』一九一九年一〇月二十九日「紀長沙商埠」、「晨報」一九一九年二月二十五日「長沙特約通訊」。
- (37) 『湖南五四史料』(前掲)「湖南工礦業的一般情況」一頁。
- (38) 古厓忠夫「中国における工業(手工業)の半植民地的再編過程——一九一〇年代の湖南省を中心として」(『新潟大学人文科学研究』四三、一九七二)七四頁。『湖南歴史資料』一九五九—四「水口山鉛鋅礦史初探」、『支那』六一三(一九一五年二月一日)「湖南通信」五二—五三頁、同前六一八(一九一五年四月一日)「再び湖南水口山の鉛銀鉱に就て」、同前六一〇(一九一五年五月一日)「湖南水口山統聞」。
- (39) 『湖南省志』(前掲)三五三—三五四頁。『長沙大公報』一九一七年四月八日、二六日、二七日、五月二日、三日「保礦会籌議日人謀奪湘礦情形」。『湖南歴史資料』一九五九—四「水口山鉛鋅礦史初探」一五五頁。『支那』九一(一九一八年五月一日)「水口山借款成立」、同前一〇一二(一九一九年五月一日)「内地に於ける外商の損害賠償に對する湖南当局の意見」、同前一一二(一九二〇年二月一日)「彙報」。
- (40) 『湖南五四史料』(前掲)「湖南工礦業的一般情況」八頁、『華昌煉錫公司的狀況』二四—二八頁。
- (41) 『長沙大公報』一九一六年四月一〇日「添設華洋訴訟處」。
- (42) 註(35)に同じ。
- (43) 『湖南教育雜誌』三一—二(一九一四年一月)滄一「論外人在湘之設學狀況」、『美人在湘設學記』。なお張朋園『中国現代化的區域研究』(前掲)一〇二頁によれば、一九一九年當時の湖南在住の外国人宣教師は三二七名であったという。『湖南教育雜誌』は湖南省教育總會の編集により、一九一二年六月長沙で創刊された。当初は半月刊で、のち月刊となったが、一六年の五卷六号で停刊。詳しくは中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』V(人民出版社、一九八七)五七七—五七八頁参照のこと。
- (44) 『長沙大公報』一九一九年一月一、二日「省城各校之現況——湘雅醫學專門學校」、『支那』一〇一二(一九一九年六月一日)「湖南省米支合辦湘雅醫學專門學校」。張朋園『中国現代化的區域研究』(前掲)一〇四—一〇五頁。『支那開港場誌』二(前掲)四〇九—四一二頁。
- (45) 『支那』一〇一一(一九一九年六月一日)「長沙在支米人の活動」。
- (46) 『湖南省志』(前掲)一四七—一五〇頁。中村義「辛亥革命研究」(前掲)第一章第四節参照。以下の叙述は古厓忠夫「中国における工業(手工業)の半植民地的再編過程」(前掲)による。

(47) 『湖南省志』(前掲)一四六—一四七頁、一五一—一五二頁。

(48) 『湖南五四史料』(前掲)「湖南工礦業的一般狀況」四五頁。古厩忠夫前掲の各論稿、『湖南省志』、『湖南人民革命史』等参照。

(49) 汪敬虞編『中国近代工業史資料』第二輯(科学出版社、一九五七)「長英領事基爾斯一九一二年商務報告」八一—九二頁。

(50) 古厩忠夫「中国における工業(手工業)の半植民地的再編過程」(前掲)七三頁表六参照。

(51) 『湖南省志』(前掲)三四八頁。

(52) 『湖南五四史料』(前掲)「湖南工礦業的一般狀況」八一—一〇頁。

(53) 『湖南省志』(前掲)三四九—三五二頁。

(54) 古厩忠夫「中国における労働者階級の形成過程」(前掲)参照。以下の叙述はこれによる。

(55) 『湖南人民革命史』(前掲)一三頁によると、一九一九年当時の湖南の近代鉱工業労働者数を四万と推定し、そのうち工場労働者は一万五千人、鉱山労働者は二万三千人、鉄道・郵電労働者は四千人としている。

(56) 『湖南省志』(前掲)三五四頁。

(57) 『湖南歴史資料』一九五九—二「華昌煉錫公司及其創辦人」、同前一九五九—四「水口山鉛鋅礦史初探」。

(58) 古厩忠夫「中国における労働者階級の形成過程」(前

掲)一八頁表四。

(59) 『湖南人民革命史』(前掲)一三頁。

(60) 『長沙大公報』一九一七年六月一日「水口山礦工暴動之真相」。

(61) 『長沙大公報』一九一七年五月四日、同前六月二日「長沙鎢夫罷工風潮」、同前六月二四日「商會議定碼頭增加工資詳情」。

(62) 『長沙大公報』一九一八年六月二六日「昨日人力車夫罷業之原因」、同前六月二八日「人力車夫罷工統誌——車業公所呈請警厅懲辦」、同前六月二九日「人力車夫罷工三誌」、同前七月二日「人力車夫罷工之結果」、『新青年』七一(一九一九年二月一日)「長沙社会面面觀」。

(63) 『長沙大公報』一九一八年六月二一日「泥木両行暴漲工価」、同前九月二二日「泥木両行仍求漲価」、『湖南省志』(前掲)四一九頁。

(64) 『長沙大公報』一九一八年九月二三日「紙業幫質議加薪資」、同前九月三〇日「紙業加価之會議」、同前九月三〇日「筆業罷工之要求」、同前一〇月一四日「筆業罷工統誌」、同前一〇月四日「酒業又有增加工価要求」、同前一九一九年三月一二日「省長規定泥木両行工価」、同前六月二二日「泥木行工人倡先漲価之影響」、『湖南省志』(前掲)四一九頁。

(65) 拙稿『湖南五四運動小史』(前掲)「おわり」参照。

(66) 楊昌濟は、日本・イギリス・ドイツの留学をへて一九一

三年湖南第一師範学校の教師として赴任、修身・教育学・倫理学を教え、一八八年に北京大学へ移る。以下楊昌済について、近藤邦康「楊昌済と毛沢東―初期毛沢東の『士哲学』」(『社会科学研究』(東京大学社会科学研究所紀要))三三―四、一九八一) 参照。

(67) 『湖南人民革命史』(前掲)一五頁。『湖南教育雑誌』三一二(一九一四年二月)「宏文図書社広告」、同三一(一九一四年一月)『公言』雑誌啓事。なお黎錦熙は一九一四年当時、湖南第一師範で歴史を教えていたが、翌年以降は北京師範学校に移り教鞭をとる。

(68) 張平子「從清末到北伐軍入湘前的湖南報界」(『湖南文史資料選輯』二、湖南人民出版社、一九六一)、村田雄二郎「長沙『大公報』について」『東方』二二(東方書店、一九八二) 参照。

(69) 『新青年』一一六(一九一六年二月一五日)陳独秀「吾人最後之覚悟」。

(70) 以下毛沢東については、竹内実「初期における毛沢東」(竹内実・和田武司編『毛沢東初期著作集 民衆の大連合』講談社、一九七八)、近藤邦康「長沙時代の毛沢東―哲学・運動・主義」(『社会科学研究』(東京大学社会科学研究所紀要))三七―五、一九八五)、李銳「毛沢東の早期革命活動」(前掲)他参照。

(71) 以下新民学会については、宋斐文『新民学会』(湖南人民出版社、一九八〇)他参照。

(72) 森時彦「フランス勤工儉学小史」上下(『東方学報』五〇・五一、一九七八・七九)、黄利群「留法勤工儉学簡史」(教育科学出版社、一九八二)他参照。